

坂田信弘さん

[プロゴルファー／坂田ジュニアゴルフ塾塾長]

坂田ジュニアゴルフ塾の塾長として、子どもたちにゼロからゴルフを教え、多数のプロテスト合格者を輩出してきた坂田信弘さん。技術面だけでなく、心の成長にも重きをおいた人間味あふれるその指導法について、語ってくれた。



ゴルフを国民のスポーツにしたい

「日本人からメジャー・トーナメントの優勝者は出そうにありませんね」アメリカでアメリカ人記者にそう言われたのが、私がゴルフ塾を開くことになったきっかけです。その一言が悔しくて、それだったら国内にジュニア塾を作って、世界に通用するゴルファーを育てようと考えたわけです。野球やサッカーと違って、ゴルフは子どもに人気のスポーツではありません。子どもの遊びにはお金がかかります。そこで、保護者に経済的な負担をかけないようにと関係機関の協力を仰いだ結果、ジュニアからすべて無料でゴルフを学べる場が実現したのです。

私自身は24歳のときに大学の恩師の勧めでプロを目指すまで、ゴルフとは縁のない生活を送っていました。ゴルファーになると決めてからは、まず筋肉を鍛えるために、鉄棒に2時間ぶらさがったり、自転車に乗って山の中を走り回ったり、川の中でクラブを振ったりと、気付いたことは何でもしました。周りは笑っていましたが、私は大真面目でした。しかし私は、球を叩けば理論なしの粗野なス



▲坂田ジュニアゴルフ塾合同練習にて

**自分の弱みも包み隠さず見せます。
心の絆を育てるためには
こちらも裸にならなくちゃ。**

ウィングの持ち主でした。粗野ではゴルフは戦いきれません。体・技・心で戦う競技には、調和力と順応力がいます。それを与えるのが理論です。子どもたちに私のような遠回りはさせたくない。だから、塾生には理論も教えます。

与えすぎは成長のチャンスを奪う

今の時代は、親も世間も過保護で子どもにあれこれ与えすぎです。塾では、クラブは3本しか持たせません。最初は3本でのスタートです。やがて上達するにつれて、7本、フルセットと、使えるクラブの本数が増えていくんです。子どもたちにとっては、たくさんのクラブを使えるのはうれしくてたまらない。だから下級生はフルセットを使える上手な先輩たちにあこがれ、練習に励むんです。また、練習では3、4ホールしか回れませんが、試合になると18ホールも回れます。それがもう楽しくてたまらない。だから子どもたちは試合が大好きです。普通試合は緊張するはずなのに、彼らは楽しんでやっているからプレッシャーを感じない。ベスト・スコアは試合で出します。塾では練習の7割は得意なことに専念させます。プロでやっていくには、強いところを伸ばすのが一番。そうやって自分の中に、自信という核を作り、どんな時にもブレない精神力を育てる必要があります。

信頼関係を築く

今の時代の子どもたちは冷めているなん

て言われますが、それは誤解です。子どもたちは熱い情熱を持っています。大人がその熱さに蓋をしてしまっているのです。確かに入塾したての子どもたちは声も小さいし、周囲とコミュニケーションを取るのが下手です。だから塾ではまず挨拶から始めます。先輩に指導させて、うまくいかないと先輩が怒られる。すると新入生は、自分のせいで先輩が叱られる姿を見て必死に取り組むようになる。先輩も必死になります。練習でも同じです。私が叱っても泣いたことのない子どもたちですが、コーチを叱ったら泣き出しました。熱さや必死さというものは、支えてくれるコーチや仲間とのあいだに、信頼する心があって初めて生まれるものだと思います。塾では、落ちこぼれの塾生がキャプテンになります。下手な子が周りに意見を言うためには練習して上達するしかない。キャプテンになった子は必死になって練習する。すると同級生はあいつがそこまで練習するなら応援してやろうって気持ちになる。後輩も同じです。先輩の必死さを見上げます。ゴルフは個人競技ですが、やはりチームメイトとの結束力が高まったときの方が断然強い。心の絆ができると、子どもたちは積極的に物事に取り組むようになっていきます。チーム力が上がれば、チームの個人力は伸びていきます。単独の力は所詮は単独でしかない。チーム力は積極性を生みます。積極さは楽観主義を作り、楽観主義は未来を創る。私が子どもたちの姿から教わったことです。

坂田信弘(さかたのぶひろ) | プロフィール

1947年熊本県出身。京都大学中退後、24歳でプロゴルファーを目指す。鹿沼CCに研修生として入社し、3年11ヵ月後にプロテストに合格。88年、ナイジェリア・イバダンオープンで優勝。現在は、プロゴルファー・作家・漫画原作者として幅広く活躍している。全国6箇所に「坂田ジュニアゴルフ塾」を開校し、総勢約500名の生徒を教えている。